

本尊の本体について

武 田 海 正

一、はじめのことば

宗政は宗團から生れ、宗團は布教から生れ、布教は宗學から生れ、宗學は本尊信仰から生れる。宗教宗團の根本生命は本尊である。宗團人は萬事をさしおいて先づ日蓮聖人の本尊を信解しなければならぬ。その意味から直接聖人の御書によつて聖人の本尊を拜むことにした。

二、本尊の三義

正直に御書を拜讀すると聖人の本尊觀には教相と觀心と人間の三義を含藏してゐる。

教相の本尊とは壽量品の佛を能統一者とせる靈山虚空會顯現の諸尊全体を本尊とし、觀心の本尊とはその靈山顯現の諸尊御自身が本尊とし給ふ壽量品文底觀心の本尊を本尊とし、人間の本尊とはその觀心の本尊が現世に人間と生れて實踐し行動する場合をいふ。

教相の本尊とは靈山顯現の本尊である。この場合、法華經の讀者と法華經の説相と、信仰を捧げる信者と信仰される本尊とは相對立する。即ち本尊は客觀的に實在してゐる。客觀的實在の本尊はあくまで崇高尊貴でなければならぬ

その時信者は尊高極りない本尊を信仰し、本尊と自己とを對比して益々自己の小をさとする。即ち本尊が崇高尊貴なればなる程、自己の劣小、愚悪なることを認識する。そうしてその有難い本尊様に向つて一度もお題目を唱へれば必ず救ひにあづかる。一聲でも祈れば必ず神佛の助をかうむる。更に進んではたとひ唱題しなくとも、祈らなくともその本尊は大悲力をもつて救つてくれる。この過程をふんで進んだのは淨土教や眞宗の彌陀信仰である。

もし當家の本尊もたゞ救済してくれるといふだけの本尊ならばそれでよい。

絶對他力を願求するのが佛道ならばそれでよい。しかし佛教は他力も自力も一切すてた無我から出發したものであるから、たゞそれだけではいかぬ。

法華經に説かれたるこの教相の本尊を聞いて、有難くて有難くてたまらなくなり、そのみ佛を見奉らんと欲して自ら身命を惜まぬ程熱烈なる信仰を捧げてゐるうち、いつのまにか自分もその靈山の衆の一人となつて、こんどは釋迦多寶十方諸佛と共に壽量品の觀心の本佛を信仰してゐる事に氣づくであらう。この信仰が進んでゆくとこんどは釋ひの我は滅して觀心の本佛の中へ攝取されるのだ。そこには拜む人も拜まれる佛も、迷悟の差別も、佛凡の對立も、佛も法も何ものもないのである。たゞ唯一絶對の觀心の本尊のみ儼然として實在してゐるのである。一度この絶對本佛を確信するとその人の心に一大革命がおこる。久遠の佛を信じなかつた以前の自分と、信じてからの自分は天地雲泥の差があるといふことに氣がつく。信前の自分は朝に生れて夕に死ぬる虫けら同様の一生物にすぎなかつた。しかるに信後の自分は久遠の佛の血脈をもちついで壽命無量常住不滅である。覺れる我は久遠の佛そのものだといふ絶對信に到達する。この久遠の生命に醒めた境地こそ信觀一如、父子一体、法佛一如ことばも心も及ばぬといふ唯佛と佛とのみがうなづき合ふ妙境なのである。この主客一如の唯一本覺佛が生きてゐるところを觀心の本尊といふのである。

一度もこの本覺佛を信解し、一念もこの壽量佛本尊を深信し得た人はその頭に、その背後に絶對無限の神秘力を有する久遠の佛の實在を感受するであらう。そうなれば行者の働は行者自身の働ではなく行者の背後にある本佛の力であるとなる。行者は本佛から生かされ、動かされてゐるものにすぎぬ事になる。

本佛は釋尊を生かし動かし語らしめ、日蓮聖人を生かし動かし叫ばしめたのである。生れるのも滅するのもすべて久遠の佛の自在神通の力だといふ事になる。釋尊が生れるのではない。生を現するのである。滅するのではない。滅を現するのである。釋尊の八十年の御活動も、宗祖の六十年の御生涯もすべてこの久遠の佛の神通力の現れでないものはない。應身爲本の思想はこの人間の本尊觀から生れる。開目抄の報應顯本の思想はこの人間本尊から湧出する。應身佛がそのまま久遠の佛体となる、この人間本尊は極めて活動的なもので、一身無量身の佛身が、現實の世界に生きて働くのである、即ち本尊の本佛が人間として活動し出すのである。

人間が佛になるのではなくて、佛が人間となるのである。佛が人間になつたのだから、その人の居る處はそのまま佛土であり、淨土である。その人の日常生活はそのまま佛作佛行である。本尊論もこゝまでくると觀念論でなくて現實に生きてくるのである。

三、教相の本尊

心に思つてゐるうちは自分の心は動いても他人の心まで動かす事はむづかしい。心に思つた事を一度ことばに表すとそれは自分を動かすばかりでなく他人をも動かす。釋尊が、さとりを言葉に表した時、聽衆の心地は六種に震動して踊躍歡喜したといふ。釋尊の覺りがことばになり、文字になり、法華經になつたのであるから、法華經をよめば、

さとの震動が天地をゆすぶるのだ。木畫二像開眼には法華經は佛の心であるととかれてゐる。

佛のみ心あらはれて法華經の文字となれり。文字變じて又佛の御意となる。されば法華經をよませ給はん人は文字と思し召す事勿れ。即ち佛の御意也。

五二七

また四條書には法華經と生身の釋尊とは同じととかれてゐる。

釋迦佛と法華經の文字とは形は異れども心は一也。故に法華經の文字を拜見せさせ給はば生身の釋迦如來にあひ進ませたりと思し召すべし。

八八三

法華經といふと法本尊の様にみえるが法華經にとかれてゐる神佛をさして法華經といつたものであるから法本尊ではない。即ち法華經は佛のみ心であるから正直に私心をすてゝ拜讀すればそれがはつきりする。法華經の説相を拜すると釋尊の弟子信者達はみな佛になつてゐるし、過去の多寶如來は現に生きてゐて法華眞實と證明し、生身の釋尊は久遠の多寶塔の中に入り給ひ、十方の諸佛は雲集し、地涌千界が出現する。釋尊は美音もて私は久遠の佛ぞと宣へ給ふ。その觀心の本尊を上行等の地涌千界に授與して虚空會の説法をはる。

靈山虚空會の儀相は今から二千五百年前に印度の靈山に顯れた過去談と思つてはならぬ。法華經は決して單なる過去の物語ではない。過去佛も十方佛も地涌千界も一時一處に集まつた覺りの聖典である。覺りには過去もなく未來もなく十方もない。いつも現在である。今なを靈山一會は儼然として實在してゐるのだ。その法華經に説かれてゐる今なを生ける神佛を信する事を法華經を信するといふのである。

妙一尼御返事云、それ信心と申すは別にはこれなく候。妻の夫をおしむが如く、男の妻に命をすつるが如く親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるが如くに法華經釋迦多寶十方の諸佛菩薩諸天善神等に信を入れ奉つて南無

妙法蓮華經と唱へ奉るを信心とは申し候也。

一九四八

釋迦多寶十方諸佛諸天善神の實在を信じて唱題するのを信心といふのであるから、信仰の對象は正しく靈山顯現の本尊であるといはねばならない。本尊抄や日女御前御返事にはその妙相が一層明瞭にのべられてゐる。

その本尊の体たらくは本時の娑婆の上に寶塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釋迦牟尼佛多寶佛まします。釋尊の脇士は上行等の四菩薩なり。

文殊彌勒等は四菩薩の眷屬として末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は萬民の大地に處して雲客月郷をみるが如し十方の諸佛大地の上に處し玉ふは迹佛迹土を表するが故也。

九四〇

こゝに日蓮如何なる不思議にてや候らん。龍樹天親等天台妙樂等だにも顯し給はざる大曼荼羅を末法二百餘年の比はじめて法華弘通のはたじるとして顯し奉る也。是れ全く日蓮が自作に非ず。多寶塔中の大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊也。

されば首題の五字は中央にかゝり四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ普賢文殊等余利弗目連等坐を屈し——日本國の守護神たる天照太神八幡大菩薩天神七代地神五代の神々總じて大小の神祇等体の神つらなる其の餘の用の神もるべきや。寶塔品云。諸の大衆を接して皆虚空に在り云云。此等の佛菩薩大聖等總じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人もれず此の御本尊の中に住し給ひ妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申す也。

一六二五

聖人は法華經の靈山虚空會の妙相を常に事實として御信仰遊ばされてゐた。それは殆んど御書全編の思想であるから誰しも疑ふ事はできぬ。靈山一會を遠い過去譚として味つてゐたのではない。現在の事實として體驗して居られたの

である。それは四條書に

我身法華經の行者ならば靈山の教主釋迦、寶淨世界の多寶如來十方分身の諸佛、本化の居士迹化の大菩薩、梵釋龍神十羅殺女も定めてこの砌におはしますらん。

一九八六

とあるによつても明かであらう。

また靈山會に集つてゐられる佛たちは木像の様にちつとしてゐて動かない佛ではない。釘づけになつてゐるのではない。常に活動してゐる。しばらくもちつとしてゐない。法華經開說中生きてゐた佛であるばかりでなく、昭和の今日も生きて活動を續けてゐるのである。彼の佛たちは過去久遠の昔から未來永恆にわたつて十方の全人類を佛の覺りに入らしめるのが目的であるから、その大理想が完成するまではかけになり日なたになつて法華經とその法華經の行者とを守護して下さるのである。上野書には釋迦多寶十方諸佛が永遠に生きてゐるといふ事をといた法華經であるから、その法華經を信する人を晝夜十二時に來て守つて下さるといへる。

釋迦多寶十方の諸佛、手づから自ら來り給ひて晝夜十二時に守らせ給はん事忝さ申すばかりなし。一九九七

多寶佛と申すは此經にあひ給はざれば御入滅この經をよむ代には出現し給ふ。釋迦佛十方の諸佛も亦復是の如し。かゝる不思議の徳まします御經なればこの經を持つ人をば天照太神八幡大菩薩富士淺間大菩薩争がすてさせ給ふべきとたのもしき事也。

一九九七

四條書云、總じて日蓮が弟子といつて法華經を修行せん人は日蓮が如くし候へ。さだにも候はゞ釋迦多寶十方分身十羅殺も御守候べし。

一八五七

聖人の如く靈山顯現の諸尊の實在を信じて法華經を弘めるならば必ず釋迦多寶十方分身の佛たちの御守護を頂く事が

できるといふのである。法華經にとかれてゐる釋迦多寶十方分身の諸佛並に地涌千界等は今なを現に生きてゐる。

しかも私共の身近に生きてゐる。生きて居つて私共を晝夜御守護下さる。こんな有難い事はない。こんな勿体ない事はない。これを信じこれを思へば感涙おさへ難く一身悦びにみちあふれる。私共は常に三佛の御守護をかうむつて法悦感謝の生活を續ける事ができるのである。

この靈山顯現の本尊を信じ奉る事によつて現世安穩の感謝の生活がつゞけられると同時に又未來觀としては靈山往詣の安心が決定するのである。それは靈山會上の佛たちは何れも過去現在未來にわたつて生きてゐるのであるから、現世に於て御守護下さると同時にまた未來も救済して下さいさるといふのは當然である。四條書や如說修行抄には三佛による來世の救済がとかれてゐる。

願くば日行を釋迦多寶十方の諸佛靈山へ迎へ取せ給へと申上候

一八五八

たとひ首をば鋸にて引切り、胴をばひしほこを以つてつき、足にはほだしを打つて錐をもつてもむとも命のかよはん程は南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱て唱へ死に死するならば釋迦多寶十方の諸佛靈山會上にて御契約なれば須臾の程にとび來て手を取り肩に引懸て靈山へはしり給はど二聖二天十羅殺女は受持の者を擁護し諸天善神は天蓋をさし、旛をあげて我等を守護して慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべきなり。

九七一

釋迦多寶十方分身の諸佛は今なを現にましまして私共をお守り下さる。のみならず未來世も私共を救つて下さる。あゝ有難い。勿体ない。かう思つて隨喜の涙を涙すのは法華經信者のいつはらぬ信仰感情である。

以上直接聖人の御書によつて聖人はいかに教相の本尊を信解してゐられたかといふ事を略述しをはつたから聖人の教相本尊に對する態度がほと明かになつた事と思ふ。これによつて聖人と同意たらんと志願するもの、聖人の眞意を

把握せんとする者の本尊に對する態度も自ら明かになつたわけである。ところが聖人は釋迦多寶十方分身の諸佛の實在を人間として、覺れる人間として法華經の行者として信仰されてゐたのであるから、更にその三佛並に地涌千界御自身^{ごみづかみ}が本尊としてゐられた本尊を本尊の本体とした事に着眼しなければならぬ。そこに光明莊嚴なる教相本尊をのりこえて次の觀心の本尊に直參し奉る契機がある。

四、教相本尊と觀心の本尊

教相本尊とは法華經の讀者が佛の姿佛の像を信仰し奉るといふ本尊であつた。その点では一般佛敎の本尊と大差はない。たゞ法華經に現れた諸尊を信仰するといふ点が異なるだけであつた。しかるに今の觀心本尊とは佛たちの觀心の本尊といふ意味である。即ち釋迦多寶十方諸佛並に地涌千界の菩薩たちの御本尊といふ事である。

本尊問答抄云、問云未代惡世の凡夫は何物をもつて本尊と定むべきや。

答云、法華經の題目をもつて本尊とすべし。——上に擧る所の本尊は釋迦多寶十方諸佛の御本尊法華經の行者の正意なり。

一七九五

これには明瞭に釋迦多寶十方諸佛の御本尊は法華經の題目であるといつてゐる。法本尊家ではこれを唯一の典據として法本尊を立てるのであるが聖人の御書全体の精神からみれば、こゝで題目といふのは壽量本佛である。それは聖人御自身すではつきりと壽量本佛の寶號を南無妙法蓮華經と仰せられてゐるのだから何人も容喙の餘地がない。

實相抄云、釋迦多寶といふも用の佛なり。妙法蓮華經こそ本佛にておはし候へ。 九五九

御義云、無作三身の寶號を南無妙法蓮華經といふなり。 八九

本尊抄云、塔中の妙法蓮華經

向記云、日蓮建立の御本尊は南無妙法蓮華經これなり。

四四

末法に入つて如法相是は塔中相承の本尊なり。如法性はは千界宛然の尊儀なり。法相は南無妙法蓮華經なり。

五三

釋迦多寶十方分身の御本尊は久遠の佛である。法華經の行者たる者は先づ三佛の御本尊たる久遠の佛をもつて本尊と定めなければならぬ。

本尊抄云、十方三世諸佛の微塵の經々は皆壽量の序分也。

九四二

十方三世諸佛の經々が壽量の序分なら十方三世諸佛の正宗分の本尊は壽量の佛に相違ない。

壽量品の佛が顯れると寶塔品の時二佛並座して釋尊と對等であつた多寶如來すらも壽量佛の所従となり分身となるのである。それに順じて三世十方の佛たちは皆、壽量佛の天月に對すれば水月であり分身である。

取要抄云、兩界の大日如來は寶塔品多寶如來の左右の脇士なり。例せば世の王の兩臣の如し。この多寶佛も壽量品の教主釋尊の所従也。

一〇三八

報恩抄云、兩部の大日如來を郎従と定めたる多寶佛の上座に教主釋尊居させ給ふ。これ即ち法華經の行者なり。今この文に教主釋尊を指して法華經の行者といつてゐる。してみると釋迦多寶十方の諸佛並に本化迹化の法華經中一切の神佛は皆法華經の行者である。これらの無量無邊の神佛が御本尊としてゐられる本尊を觀心の本尊といふのである。即ち壽量品文底觀心の無始久遠のさとりが觀心の本尊である。

靈山顯現の諸尊の姿を本尊としたのが教相の本尊であり、諸尊御自身の覺りを本尊としたのが觀心の本尊である。

だから觀心の本尊を己心の本覺佛といつてもよいし、壽量品文底觀心の本佛といつてもよい。觀心の本佛は五百塵点以前の無始の古佛であつて、無始以來十方世界に分身散体して常に説法教化し給ふ一身無量身の佛である。天の一月が萬水に影を映す様に一身でありながら無量身を示現する佛である。一身であつて無量身だから年紀の大小も名号形色も定まつてゐない。繪に描いてみられる三十二相や八十種好がある佛ではない。但し限定された形聲はないが無限の形色を有する。時により處により相手によつて千變萬化の形聲を示現し給ふ自由自在の佛である。久遠の生命そのままのお姿を見聞し奉る事はできない。たゞそれは佛と佛とのみよく覺り給ふ覺りであるといふより外にいひ表し様がない。しかし久遠の佛の顯現相は見奉る事ができる。その顯相を通して久遠の佛の實在を信じ奉るより外にはない。即ち教相本尊を通してこの觀心本尊の實在を信じ奉るのである。その壽量佛本尊をいひ表すのに聖人は時處により人によつて色々な言葉を用ひてゐる。言葉はちがつてゐてもその信仰内容は同じである。

開目抄云、この壽量佛の天月

七六五

久遠の佛

七九〇

本尊抄云、塔中の妙法蓮華經

九四〇

壽量の佛

九四〇

本門壽量品の本尊

九四〇

本門の本尊

九四七

本門の釋尊

九四八

一闍浮提第一の本尊この國に立つべし

九四八

本尊の本体について

九五

本尊の本体について

九六

實相抄云、本門壽量品の古佛たる釋迦佛(九五九) 一閻浮提第一の御本尊

九六三

富木抄云、壽量品の佛

九七九

顯謗法抄云、壽量品の釋尊

一〇一六

寶經法重事云、壽量品の釋迦佛

一八五三

報恩抄云、久遠實成の釋迦佛

一五〇四

本門の教主釋尊を本尊とすべし

一五〇九

我等がその壽量佛本尊に向つて不惜身命の信仰を捧げると迷ひの我は消えうせて唯一絶対の壽量佛一尊の体内へ攝取されてしまう。そこには拜む人も拜まれる佛も、迷ひも悟も、法も佛も何ものもない。たゞあるものは觀心の本尊一体である。觀心本尊とは釋尊と我等人間を生かし動かし育て給ふ久遠の生命であり、さとりである。實に釋尊と日蓮聖人の觀心の本尊は無始の古佛であり、久遠の本覺尊であつた。

本尊抄云、然るに我實に成佛してより已來天量天邊百千萬億那由他劫なり。等云云、我等が己心の釋尊は五百塵点乃至所顯の三身にして無始の古佛也。

九三八

この觀心の本尊は釋尊が無始以來己心に秘めておかれて法華經本門壽量品に到つて始めて開説されたものであり、本法の初に聖人が始めて信解宣揚されたものである。聖人自ら新尼殿御返事に

今この本尊は教主釋尊五百塵点劫より心中におさめさせ給ひて世に出現せさせ給ひても四十餘年その後又法華經の中に迹門はせすぎて寶塔品より事起り壽量品に説き顯し神力品屬累に事極り候

一〇九一

といひ、日蓮當身の大事本尊抄には

如來滅後五百才始觀心本尊

九二八

と題された所をみると、觀心の本尊とは釋尊の外形ではなく釋尊の覺りの心、聖人の觀心の本尊であつたといふ事に就ては何人も疑ふ事はできぬ。

各宗では佛形、佛像を本尊としてゐるけれども本宗では佛心を本尊とする。佛の覺りを本尊とする。久遠の生命を本尊とする。佛の悟つた久遠の本覺尊を本尊とするのである。

その本覺の佛は過去にも滅せず未來にも生ぜざる常住不滅の如來であつて、三佛並に本化迹化等一切の本尊たる久遠の生命である。

立正觀抄云、法華經の佛は壽命無量常住不滅の如來也。

一〇七三

本尊抄云、佛すでに過去にも滅せず未來にも生ぜず所化もつて同体なり、

九三九

一度もこの久遠の生命を体得し、觀心の本尊を信得した人は本尊抄の送狀の如く三佛の顔貌を拜し奉る事ができるのである。その人の心には常に本覺の佛が生きてをり、その人の心眼にはいつも靈山顯現の尊容が映じて忘れようとしても忘れる事はできないであらう、

釋迦はその人を善哉とほめ、多寶はこれを皆是眞實と證明し、十方分身の諸佛はこよなく喜び給ふであらう。かうした心地に住した人はすでに佛眼を開いたのであるから、その人の世界觀人生觀は信前のそれとは全々異なるに相違ない。それは次の人間の本尊によつて明かになるであらう。

五、觀心本尊と人間の本尊

觀心の本尊たる久遠の佛は毎に自らこの念をなす。何を以つてか衆生をして無上道に入り速かに佛身を成就する事を得せしめんといふ大願を立て給ひ久遠の昔から今に到るまで大宇宙を家として教化運動を續けてゐるのだ。その教化運動は先生が學生に教へる様な相對的なものではない。先生が學生になり切つて教育する。先生が學生の心中へ應生して教育するといふ教化法をとるのである。即ち佛自ら人間となつて教化するのである。

時間をこえ空間をこえ因果をこえてゐる久遠の佛は自ら自己を限安して時間と空間と因果によつて織りなされてゐる現實の世界へ人間と生れてくる。即ち從果向因である。人が佛になるのではない。佛が人間になるのである。人間に生れてくるといつたのでは信じ難いといふならば人間の良心と生れてくる。人間の覺りの心と生れてくるといへばよい。人間の良心、佛性、神性と生れてきて内部から人間を教導する。世にこれ程巧妙なる教化方法が又とあらうか。觀心の本尊を信じ己心の本佛を信すれば心の中に震天動地の大革命が起る。世界觀も人生觀も一變する。信前の自分はこの世界を苦の娑婆と思つてゐた。自分も他人もこの世の中は一切思ふ通りにならぬもの、自己の意志のまゝにならぬものと思つてゐた。我慾に反するものを惡と思ひ、我慾に添うものを善と思つてゐた。ところが人間としての我は假現の我であり、眞の我は久遠常住金剛不壞の佛だつたといふ事を確信すると同時に、さうした信前の苦しみ惱みの迷ひの雲は雲散霧消して、そこに實相眞如の月をみる事ができるのである。

法華經は語る。人間はすべて久遠の佛の應生であると。佛はなぜ清淨なる業報をすてゝ人間へ生れてくるのか。それは人間をあはれみ人間を敬愛する爲であるといふ。然らば人間を本當にあはれみ敬愛するにはどうすればよいか。本當に人間を敬愛するにはまづその人の眞價を認めなければならぬ。人は自分の眞價を認めてくれる人の爲には命をもするものである。釋尊が不輕菩薩であつた時代、あらゆる人間を佛様だといつて禮拜した。お經もよまないでた

と一心に人間を禮拜した。杖木瓦石の難にあつても但行禮拜をつとけた。

御義云、不輕禮拜の行は皆當作佛と教ふる故に慈悲なり。すでに杖木瓦石をもつて打てども而強毒之するは慈悲より起れり。佛心とは大慈悲心是なり。

一一一

波木井御書云、不輕菩薩は法華經の爲に杖木を蒙りて忽に妙覺の位に登り給ふ。日蓮此經の故に現身に刀杖を被り二度遠流に當る。當來の妙果之を疑ふべしや。

九八二

あなたは神様です。あなたは佛様ですといふ。世にこれ以上人を尊敬する方法があらうか。人間を尊敬し人間を慈愛する心は神の心であり佛の心である。

本當に尊いものは常に西方淨土にまします阿彌陀佛ではない。この世の中に人間と生れて來て佛の心を實行してくれる人である。人間の中で神佛の心をそのまま實現してくれる人である。人間の中で神佛を地で行く人である。釋尊や日蓮聖人が人から尊敬されるのは人を尊敬したからであり、神佛の心を實現したからである。

撰時抄云、余に三度の高名あり。一には去し文應元年七月十六日に立正安國論を最明寺殿に奉り——二には去し文永八年九月十二日申時に平左衛門尉に向つて云く日蓮は日本國の棟梁なり。予を失ふは日本國の柱を倒す也。第三には去年文永十一年四月八日左衛門尉に語つて云く。平地に生れたれば身をば隨へ奉る様なりとも心をば隨へ奉るべからず——この三の大事は日蓮が申したるには非ず。たと偏に釋迦如來の御神、我身に入りかはらせ給ひけるにや。我身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。一二四二

人間が佛になつたのではない。佛が人間になつたのである。佛が人間になつたのである佛が人間になつて佛心を實行したのである。通佛教では人間が佛になる爲に修行する。本化佛教では佛が人間になつて活動する。それこそ奇蹟以

上の奇蹟ではないか。莊嚴無比なる久遠の佛が見すばらしい我等の中に我等の心に住むといふのだ。

日女抄云、此御本尊全く餘所に求る事勿れ。只我等衆生の法華經を持つて南無妙法蓮華經と唱る胸中の肉團におはしますなり。是を九識心王眞如の都とは申す也。

一六二六

本尊抄云、我等が己心の釋尊は五百塵点乃至所顯の三身にして無始の古佛なり。

九三九

御義云、衆生の心は本來佛なり。

一五四

壽量品によれば久遠の佛が人間釋尊となつたのである。その悟に於ては釋尊も我等も差別はない。釋尊が久遠の佛ならあらゆる人間は皆久遠の佛の應生でなければならぬ。

向記云、釋尊と同等の佛果を得て自身本覺の如來なり。

三八

御義云、當品の意は我とは法界の衆生なり。

九一

釋迦如來の悟の如く一切衆生の悟も異なることなし。

一六二

本尊抄云、妙覺の釋尊は我等が血肉なり。

九三九

人間は皆久遠の佛の應生なら誰でも顯本する事ができるのであり、寶塔品の時十方より來集した分身の佛とは現世に生きてゐる人間の事であり、地涌の菩薩とは日蓮聖人及び我等日本人の事である。

開目抄云、法華經前後の諸大經に一字一句もなく法身の無始無終は説けども應身報身の顯本はとかれず。

七六六

あの人もこの人も皆久遠の佛の應生ならその人の住む所はそのまま光明淨土であり、その人の言行はすべてこれ佛作佛行でなければならぬ。日常生活がそのまま佛の大道でなければならぬ。

向記云、我等衆生の振舞の當體、佛の振舞なり。

二六

もし日常生活が神の心、佛の心に添はないものであつたら大いに懺悔し反省して神佛の御心に添う様に努力しなければならぬ。お互ひに神佛のみ心に添う様に努力し精進する所に神佛が生きてゐるのだ。神佛のみ心に添はないのを罪といひ罪障といひ、神佛のみ心に添うのを佛といひ功德といふのである。

萬民各々神佛の心を心とし與へられたる天職を全うし、天壤無窮の皇運を扶翼し奉る所に神佛は生きてゐるのだ。聖人はこの神國日本をもつて本門壽量品の大曼荼羅建立の在所といはれたではないか。一閻浮提第一の本尊この國に立つべしといはれたではないか。

御義云、本有の靈山とはこの娑婆世界なり。中にも日本國なり。法華經の本國土妙娑婆世界なり。本門壽量品未曾有の大曼荼羅建立の在所なり。

一一

本尊抄云、この時地涌千界出現して本門の釋尊の脇士となり一閻浮提第一の本尊この國に立つべし。九四八これは一尊四士の本尊形式論ではない。本佛同体の地涌の菩薩が大日本國民と生れて來て、皇運扶翼大政翼贊の爲に本門壽量品文底觀心の本尊義を弘宣して國民精神教化運動を實行するといふのだ。地涌千界とは生きた人間を指す。本像の事ではない。本門の釋尊とは觀心の本尊だ。單なる印度人ではない。久遠の生命の覺りだ。

萬事を生かして大政翼贊へ慕進せよ、國家と共に歩んで世界新秩序建設の礎石となれ。日蓮聖人の本願はそれより外になかつた筈だ。

安國論云、天下泰平國土安穩は君臣の樂ふ所土民の思ふ所也。夫れ國は法によつて昌へ法は人によつて貴し國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき法を誰か信すべきや。まづ國家を祈りて須く佛法を立つべし。三八四

開目抄云、我日本の柱とならん。我日本の眼目とならん。我日本の大船とならん等と誓し願やぶるべからず。

八一六

一昨日御書云、世を安んじ國を安んずるを忠となし孝となす。是偏に身の爲に之を述べず。君の爲、佛の爲、神の爲一切衆生の爲に言上せしむる所也。

六八八

法の爲には命をすてる。國の爲には人柱となる。それを實行した人は神佛の心を實行した人であり、臣道を全うした人であるといはねばならぬ。

心眼を開き佛眼を開いて現實の世界をみよ。そこに久遠の天照太神を國体とせる君民一体の神國日本が現存してゐる。日本を神國といふのは奇蹟があるからではない。日本には神の子が居住してゐるからである。神の子が生活してゐるから神國といふのである。天照太神の末孫が生きてゐるから神の國といふのである。

日蓮聖人の開宗直前の伊勢大廟における奏願、建長五年四月二十八日の大日輪に向つての立教は文献以上の天照太神信仰を物語る。又開教より二十年後の文永十一年十二月延山圓顯の大曼荼羅に天照太神を妙覺位と勸請し奉つた密意を拜すると有難さに涙がこぼれる。

高橋抄云、日本國の王となる人は天照太神の御魂の入りかわらせ玉ふ王なり。

一二八五

撰時抄云、日本國と申すは天照太神の日天にてまします故也。

一二三三

御書云、天照太神の住初給し國へ、いかなる宿習にてや候らん。日蓮又彼國に生れたり、第一の果報なるなり。

一〇三四

治部抄云、日本國はいみじき國にて候。神を敬ひ佛を崇る國なり。

二〇六七

天照太神の聖血はわれら國民の血潮のうちに脈々として生動し、天照太神實在の信仰は國民の不抜の信條となつてゐるのだ。天照太神はわれらと共に生きてゐる。久遠の昔から未來永劫にわたつてわれら心の中に生きてゐる。我國の國體たる天照太神に於て君民一體であるといふ事は何人と雖も疑ふ事のできない事實である。この事實を十界宛然の尊儀といふのである。今現に神の國が大地の上に實現してゐる。これぞ世界人類の至寶ではないか。

向記云、今末法に入つての如法相是は塔中相承の本尊なり。如根性是は十界宛然の尊儀なり。法相は南無妙法蓮華經なり。根性は日本國の一切衆生、廣くは一閻浮提の衆生なり。

五三

教相本尊から觀心の本尊を信じ人間の本尊に來つて現實の世界國家をみよ。そこに十界宛然の尊儀が展開されてゐるあそこにも分身の佛が居り、こゝにも地涌の菩薩が居る。向う三軒兩隣にちらほらする人も皆神様佛様にみえる。日本の國土そのまゝ天人常充滿の神の國である。

もしそんな風にみえぬ。人間はやつぱり人間だとしか思へぬならば、それは法華經を本當に信じてゐるのではない神佛の心を心としてゐるのではない。さういふ人は惡業の因縁で無量劫の間三寶のみ名すら聞かぬ罪障深重の人であるから大いに懺悔滅罪して益々法華經を讀み味ひ信仰しなければならぬ。

家族も國民もすべて神佛の再來と心から思へる様になつて、本當に人間を敬愛する事ができる様な精神状態をつくるのが宗教運動の最後の目的である。人間お互ひにこの心地を實行すればこの地上に眞の樂土が實現するのである。

佛土建設も淨土建設もそれをおいて外にはない。自行も化他も、たゞその事を目的としなければならぬ。その外の才覺全く無益だ。